

アラビア半島で誕生し、世界各地に拡大する過程で多様化したイスラームの実態とはどのようなものか。本共同研究は、世界の各地域におけるイスラームの実態を、映像という媒体を用いて地域横断的に考察し、その「共通性と多様性」、「共通性自体の多様性」について議論することで、地域間比較を可能にするための共通軸を模索するという趣旨で発足した。2011年度には、アラビア文学を専門とし、神戸モスクの建立史についての研究も行っている福田義昭(大阪大学)、イランのシーア派法学界と国家構造の研究を行っている黒田賢治(京都大学)の2名が加わり、より広い地域の事例をカバーできるメンバー構成となった。2010年10月の発足から2011年10月までに6回の研究会が行われ、回を重ねるごとに議論も深まってきた。今回は、本年度に行われた研究会を中心に、その内容とこれまでの議論の論点を紹介したい。

シーア派の宗教実践を観る

昨年度に行われた4回の研究会では、中国、ベトナム、カザフスタン、エジプト、インドネシア、イスラエルなどにおけるイスラームの実態について地域研究あるいはイスラーム研究の視点からの報告が行われた他、地域間比較における映像活用の可能性を見据えた映像人類学の視点からの話題提供も行われた。映像の活用についての報告は本稿後半で触れることにして、まずは、2011年8月に開催された本年度1回目の研究会における黒田と椿原敦子(大阪大学大学院)によるシーア派の報告について紹介したい。

黒田は、人口の大半がシーア派信徒であるイランの事例から「12イマーム・シーア派哀悼儀礼における象徴化装置の多様性—現代イランの映像資料を手がかりに」を報告。12イマーム派の哀悼儀礼の分析を通して、「イスラームの共通性」と映像資料の活用方法を問う報告であった。この点について黒田は、イスラームを「想像の共同体」とする自らの立場を示したうえで、調査地において「ムスリムであることが顕在化される」事象のひとつである哀悼儀礼に着目した。非業の死や殉教を遂げたシーア派指導者(イマーム)に対して行われる哀悼儀礼は、その名称や方法に地域間の差異が認められるものの、第3代イマーム・フサインに対する哀悼儀礼は「シーア派としての統一性を担保する儀礼の一つ」であるという。報告では哀悼儀礼についての詳細が説明された後、「『痛み』の追体験」の様子、哀悼歌手によって即興として歌われる哀悼歌、それに合わせて信徒が体を動かす哀悼集会の様子を撮影した映像が上映された。

椿原は「哀悼の可視化と不可視化：ロサンゼルスにおけるシーア派ムスリムの服喪儀礼の比較考察」について報告した。ロサンゼルスのイラン人ムスリムによるフサインの服喪儀礼(哀悼儀礼)について、本国で生じた政治・宗教関係がいかに影響を与えているのかという視点からの分析である。イラン革命を可能にしたとされる「カルバラー・パラダイム」(国民の

受難と抵抗を第3代イマーム・フサイン一族のカルバラーでの戦いと殉教の物語への読み替え)の影響を問題としながら、在米イラン人ムスリムの間においてもムスリム性が顕在化する服喪儀礼の様子と不可視化の事例が、映像を通して報告された。

シーア派はイスラームの二大宗派のうちスンニ派に次いで信徒数の多い宗派であるが、その実態についての情報は限られている。即興の音楽や身体動作を伴う哀悼集会のように、文字化することが難しい実践について、映像による報告はひとつの有効な手段であることが確認された。また、2つの報告の後に行われた討論では「イスラームの共通性」とは何か、「イスラーム」とは何か、といった概念をめぐる認識の問題についても議論された。

「イスラームの共通性」について考える

本共同研究の目指す地域横断的な比較研究のための共通軸を設定するには、「ムスリム」や「イスラーム」についての概念的な整理が必要である。この議論については、昨年度の研究会における小杉麻李亜(日本学術振興会特別研究員)の報告が出発点となる。

イスラーム研究を専門とする小杉は、自らが設定した項目に基づき、地域の異なるイスラームの共通性と多様性の比率を数値化して示した上で、「どれほど乱れていたり、歪んでいたり、断片的であったとしてもファーティハを口にすることでかどうかがムスリムと非ムスリムの違いであるという定義を行った。

イスラーム研究の立場から小杉が行った定義に対し黒田は、聾ムスリム団体によるクルアーンのAmerican Sign Language化の事例などを挙げ、「共通性」とは何かを突き詰めて考えると「要素還元主義では限界がある」とする。そこで黒田はマクガイア(2008)による「世界宗教の境界の理解の方法のひとつである『想像の共同体』という方法」に依拠し、宗教としてのイスラームを「想像の共同体」、ムスリムをその「住人」という共通性を境界として設定した。

しかしながら、この立場から「イスラーム」を捉えようとすると、クルアーンが存在やアラーへの礼拝など、歴史的には明らかにイスラームの影響を受けてきたにもかかわらず、自らをムスリムとは自称せず、イスラーム共同体の一員としても位置づけられないベトナムのチャム・バニなどは、「イスラーム」という同じ俎上に載せて論じることが出来なくなる。

このように、専門や調査地の異なるメンバーが「イスラーム」あるいは「イスラームの共通性」について定義しようとすると、それぞれの「認識」の違い、個別社会の事例を学術的に議論された概念に適用することの限界が明確になる。この問題をどのように克服するかは、今後に残された課題である。

家族的類似としての「イスラーム」

研究者の立場によって、イスラームは様々に定義される。

討論では、こうした議論を克服するための可能性も提案された。そのひとつが「家族的類似」という概念の導入である。

「家族的類似」とは、ある概念を共通する特性で定義することは出来ない、とするウィトゲンシュタインの考えである。ニーダムはこの概念を援用し、人類学における「家族」や「婚姻」といった概念がすべての社会に適用されるわけではないことを主張した。そして、家族的類似と同じ視点に立った多配列分類、つまり、「諸個体が全体としては一つの特性も共有しない」という視点からの分類の方法と単配列分類、すなわち、「あるクラスの個体すべてが少なくとも一つの共通特性を持つ」という視点に立つ分類の方法を自然科学から人類学に導入した(ニーダム 1993: 88-89)。

こうした視点から見ると、様々なイスラームの定義のあり方は、イスラームが何か共通の特性を共有している、という立場にたっているという点で、単配列的な思考に基づいていることになる。

しかしながら本共同研究において報告される事例の多くは、個別社会において顕在化される「ムスリム」の多様性、イスラーム・非イスラームといった要素に分離されることなく「当たり前」の宗教実践として人々に生きられているイスラーム実践や「ムスリム」社会の実態である。

家族的類似あるいは多配列分類という概念を導入することで、チャム・バニのような「イスラーム共同体の一員」としての自己認識を持たない主体を「イスラームの共通性」という同じ俎上に載せて論じることが可能となろう。また、地域間比較研究における映像が持つ意味もより明確になると思われる。例えば「イスラームの共通項」として自明視されてきた「ラマダン」、「サラー(礼拝)」、「クルアーン朗読」などを多配列クラスと捉えることで、要素還元主義に陥ることも、また、個別社会の事例に埋没することもなく、「共通項」の地域間比較が可能になるのではないだろうか。

記述しえない事象を映し出す装置としての映像

では、どのような映像資料が活用できるのか。2010年度の2月に映像人類学を専門とする村尾静二(総合研究大学院大



鎖を用いた「痛み」の追体験「ザンジール・ザニー」。イラン、コム市にて(黒田賢治撮影)。



イラン、シーア派の聖地コム市における哀悼集会の様子(黒田賢治撮影)。

学)による報告が行われ、民族誌映画と呼ばれるものにも、2つの極があることが指摘された。ひとつは、記録媒体としてのフィルムで、フッテージフィルムともよばれる。もうひとつは、表現媒体としてのフィルムで、撮影と編集により、製作者の視点を具体化するドキュメンタリーフィルムなどである。前者は客観性の情報を、後者は主観性の情報を伝達する媒体となると考えられる。

このうち本共同研究が重視するのはフッテージフィルムである。2011年10月の研究会では村尾が「映像による比較研究はいかにして可能か——映像人類学におけるフッテージフィルムの位置づけ」について報告し、マーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンが制作した*Bathing Babies in Three Cultures*、*Childhood Rivalry in Bali and New Guinea* など、フッテージフィルムの鑑賞とその解説も行われた。

イスラームを含む世界宗教の実践の場においては、人々が「当たり前」なものとして実践し、その社会の文脈においてしか説明することのできない概念や儀礼も、多くの場合は、諸要素を「分離」し、既存の概念や宗教用語を用いて記述されることになる。このことは私たちが有する概念装置の限界を示していると言えるが、映像資料は、記述できないあるいは記述の過程で捨象されてしまう要素を映し出し、より開かれた議論を可能にする媒体である。

【参考文献】

- ニーダム、ロドニー 1993(1979)『象徴的分類』吉田禎吾・白川琢磨訳 みすず書房。
マクガイヤ、メレディス・B. 2008『宗教社会学——宗教と社会のダイナミクス』山中弘・伊藤雅之・岡本亮輔訳 明石書店。

よしもと やすこ

国立民族学博物館外来研究員。専門は文化人類学。特にベトナムを故地とする離散民族チャムとイスラームの関係について関心を持つ。宗教実践に関する研究における映像の役割についても関心があり、映像作品に「もうひとつのラマダン——ベトナム中南部に暮らすチャム・バニのラムワン儀礼」(2009年)がある。